

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 5 月 25 日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03245

研究課題名(和文)GISデータベースの活用による前方後円墳の地域性に関する歴史地理学的研究

研究課題名(英文)A Geographical Research on Regional Characteristics of Keyhole-shaped tumuli : An Attempt of application of GIS

研究代表者

出田 和久 (IDETA, Kazuhisa)

京都産業大学・文化学部・教授

研究者番号：40128335

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：前方後円墳をはじめとする各種墳形(多様な形態の古墳)のGISデータベースを構築し、古墳の規模、立地、副葬品などの分布に関して全国的視野から検討を行った。その結果、前方後円墳を筆頭とする4つの古墳の形による序列が存在したのは、古墳時代のはじまり(3世紀半ば)からではなく、古墳時代の前期後半から中期にかけての時期であったことが指摘できた。また、時期による各種墳形の古墳分布の特徴を明らかにした。

後期と終末期の大規模円墳に注目することで、古代における豪族の分布と対比させ、地域ごとの有力集団の存在や地域間の関連についての検討を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は5,300基を超える前方後円墳に止まらず主要な円墳・方墳もデータベースに登載し、全国的視野で各地域の古墳の特徴を地方首長層の動向とも関連づけて分布論的に検討する点に意義がある。さらに、日本列島内における古墳時代の各地域の地域相とその変遷に関して明らかにする意義は大きく、相互の比較を通じてそこに何等かの共通性を認めうるのか検討できれば、古墳時代を初期国家と捉えることの是非についても明らかにする資料となり、波及効果が大きい。

百舌鳥古墳群等の世界遺産への登録により一般に関心が高まっている古墳に対する理解を促進することとなり、貴重な文化財の保全に資するところ大なるものと期待できる。

研究成果の概要(英文)：I constructed a GIS database of various forms of tumuli including the Zenpokoehun(Keyhole-shaped tumulus) and the Enpun(Round-shaped tumulus) and examined the size, location and distribution of burial items from a nationwide perspective.As a result, it was not from the beginning of the Kofun period ,the middle of the 3rd century, that the order of four types of Kofun burial mounds, with the Zenpokoehun as the first, existed from the latter half to the middle of the Kofun period.

In addition, the characteristics of the tumulus distribution of various forms of tumuli were clarified according to the detailed division of the Kohun period.By paying attention to the large-scale burial mounds in the latter and the last stages of the Kohun period, we attempted to examine the existence of powerful groups in each region and the relationship between the regions by contrasting with the distribution of ancient people in ancient times.

研究分野：歴史地理学

キーワード：前方後円墳 GISデータベース 歴史地理学 地域性 前方後円墳 立地 円墳 古墳時代

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

古墳時代には巨大な墳丘を有する墓が盛行した。前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳はその基本的形態で、その規模はさまざまではあるが、規模に注目すると最大のものは、前方後円墳は大阪府堺市の大山古墳で墳長が 486m、前方後方墳は奈良県天理市の波多子塚古墳 140m (ただし、1 段目が前方後方形、2・3 段目が前方後円形の西山古墳は約 190m)、円墳は埼玉県行田市の丸墓山古墳が 102m (最近、奈良市の富雄丸山古墳が約 110m と同じ)、方墳は奈良県橿原市の榊山古墳が一辺 85m で最大である。また、築造数をみると前方後円墳は 4800 基余と、460 基ほどの前方後方墳に比べて 1 ケタ多く築造された。また、円墳は後期の群集墳を含めると数万～十数万基に達する。数的には円墳が圧倒的に多いが、前方後円墳は大規模なものが多く築造され、景観的にも目立つ存在であった。

前方後円墳研究では、ほぼ本州北部から九州にまで広く存在することは、単に墳墓の一形式が伝播しただけにとどまらず、その背後に政治的な意味を見出している。相互に離れている前方後円墳の形態が類似し、墳形に一定の築造企画があり、その変化過程や築造尺度などについても研究が進められ、さらには築造企画の共通性を通じて中央と地方の首長間の本末関係が表示されるとのアイデアが出された。

1990 年には都出比呂志氏により、基本的には 3 世紀半ば以後の倭の社会は国家段階に達したと捉え、この社会関係、特に首長の系譜や格式を考古学的に象徴するものが、前方後円墳を頂点とする墳形と規模の二重原理による政治秩序の形成であるとする前方後円墳体制の提唱がなされた。

これに対しては、主として日本古代史の側から都出氏の主張する『初期国家論』に関して身分編成や国家形成をどう捉えるかなど議論の前提となる術語の「定義」や小経営の実証や倉庫をめぐる解釈などの批判があった。一方、考古学分野から前方後円墳の時期別分布の変遷や地域的な存在態様そのものを取り上げたうえで具体的な直接的な批判は少なかったが、早くに東海地方に多く見られた前方後方墳を地域性の強い独自の発展型式を有する墳丘墓と位置づける見解も出された。総じて、考古学の側からは従来の同範論の影響などもあって巨大前方後円墳を頂点とする統一した政治秩序のイメージが基底に存在したせい、前方後円墳体制の提唱には大きな反論はなかった。具体的な分布を提示しての主張と言うよりも理念的な側面が強いものであった。

古代史との関連では在地豪族の動向と関連させて地域的視点での古墳研究も行なわれているが、一部地域の事例研究に止まり、全国的視野に立って主要な円墳・方墳も考察対象に含め、在地豪族の動向や墳丘形態の相違を加味し、全国的な首長層の動向とも関連させた検討が必要と考えられる。

そこで歴史地理学的視点から、これら前方後円墳をはじめとする主要古墳の全国的な分布のありようを明らかにするとともに、地域的特色を明らかにする必要がある。そのためには GIS の活用が効果的である。GIS の歴史分野への応用は、イギリスのホッターによる考古学研究への応用が端緒となり、日本では考古学分野で 2001 年の『考古学のための GIS 入門』を嚆矢とし、2006 年には『実践考古学 GIS 先端技術で歴史空間を読む』が刊行された。歴史地理学分野では 2012 年の『歴史 GIS の地平 景観・環境・地域構造の復原に向けて』で「H-GIS を発見的に活用する」等などの H-GIS の課題が示された。

< 主要参考文献 >

- ・小林行雄 1961 『古墳時代の研究』 青木書店
- ・上田宏範 1969 『前方後円墳』 学生社
- ・Hodder,I.R. 1972: Locational Models and the Study of Romano-British Settlement, in Clarke,D.L.ed.:Models in Archaeology
- ・近藤義郎 1983 『前方後円墳の時代』 岩波書店
- ・石上英一 1991 「コメント 都出比呂志「日本古代の国家形成 前方後円墳体制の提唱」についての覚書」『日本史研究』 343
- ・白石太一郎 1991 「常陸の後期・終末期古墳と風土記建評記事」『国立歴史民俗博物館研究報告』 35
- ・赤塚次郎 1996 「前方後方墳の定着 東海系文化の波及と葛藤」『考古学研究』 43-2
- ・都出比呂志 2005 『前方後円墳と社会』 塙書房

2. 研究の目的

前方後円墳 (前方後方墳を含む。以下、特に断りのない限り同様) に加え、全国に 10 数万基存在するとされる円墳・方墳等の内、国や県の史跡指定を受けている主要な古墳を加えたデータベースを構築し、GIS ソフトウェアを活用して以下のようなことについて検討する。前方後円墳を中心に円墳等の主要古墳を含めて、全国的視野の下に分布論的に検討を加え、それら古墳の地域的な特色を明らかにする。この際時期による様相の違いにも着目する。なお、古墳が築造された時期については様々な見解があるが、本研究では前方後円墳と前方後方墳については『前方後円墳集成』の 10 期編年、円墳・方墳などについては報告書や史跡指定関連の情報を主要なデータソースとした。個々の古墳の年代については種々問題があるものもあるが、データベース化し全体的傾向を検討することが基本となる本研究では取り上げない。

データベースに格納した古墳の属性毎及びその組合せによる分布図の作成を通じて、分布論的視点からいわゆる「前方後円墳体制」の実態を実証的に明らかにし、さらに主要地域の地域相と地域性及びその変遷をダイナミックに描出し、定説となっている観がある墳形と規模の二重原理による身分表示のシステムとしての前方後円墳体制について、当該システムが日本列島のどのような範囲に、古墳時代のどの時期において適用できるのか等について明らかにする。古墳時代の豪族に関する研究ともリンクさせて、日本列島における古代国家成立前後の政治状況と地域相について、全国的視野から各地域の古墳の特徴を地方首長層の動向と古墳の規模あるいは内部構造、副葬品など多様な属性の分布やその変化とも関連づけて検討する。地域的個性にも目を向けた新たな古墳時代の地域像を検討する。

3. 研究の方法

本研究では、前方後円墳を基礎に主要な円墳・方墳を対象に加える。前方後円墳については『前方後円

墳集成』(全6巻、山川出版社、1991~2000)があるが、円墳・方墳についてはそのような資料がないため、各県の史跡指定情報および奈良文化財研究所の遺跡データベース等を活用してまず主要な円墳・方墳を中心にリストアップし、発掘調査報告書やインターネットを使用してデータ収集を行う。時期区分に関して円墳・方墳については、『前方後円墳集成』で採られている10期編年は困難であることから、古墳時代前期、中期、後期の3期区分に7世紀を終末期として加えた区分を採用することとした。

基本的な流れとしては、リスト化した古墳の資料収集と整理を行い、既存の前方後円墳データベース(規模、内部構造、内部主体(棺の形態や材質)、青銅鏡や玉(碧玉製腕飾り)類等の威信財及び武器、農具等の副葬品、埴輪や葺石等の外表施設を属性情報とする)に主要円墳・方墳のデータを追加する、

地域毎に時期別に古墳立地の様相について検討する、地方首長層の動向を検討するための古代史関連文献の収集と整理を行なう、具体的な検討地域についての現地調査(古墳造営の地域集団の立地基盤水田可能地や交通条件 etc. などの検討)を行なう、これらを踏まえ古代の前史としての地域的個性を重視した新たな古墳時代像を検討する。なお、～に関連して、古墳の立地を生産基盤や交通の要衝との関連のほか、古墳時代の物資の流通との関連も視野に入れて資料収集と調査を行なう。

4. 研究成果

(1) 古墳分布の時期・規模・立地に関する検討

以下では、紙数の制約もあるので主として構築した古墳のGISデータベースから分かることを中心に述べることにする。

前方後円墳を頂点とし、墳形による序列、格付けがあり、規模による実力表示があるという前方後円墳体制論の中心的事項について、まず時期別の墳形別分布をみると(表1)、前方後方墳は前方後円墳の十分の一程度の数しかないうえに、時期が判明している(推定も含む)262基の89%の232基が前期の築造で、中期は10基、後期は20基に過ぎず、中期以降は前方後円墳に次ぐ実力表示であるはずの前方後方墳が僅かしかないという点は、4段階の序列が存在したとしても前期に限られるということになる。因みに10期区分でみると1~3期で200基を超え、4期は28基である。地域別では約3分の2の159基が中部以東に分布し、規模別では100m以上は5基で、以西の3基よりも多いが、最大は奈良県の波多子塚古墳で約140m、次いで同県の新山古墳の137mであるものの分布の中心は東日本にある。注目されるのは大半の地域では前期のみ見られたのに対して、島根県では前期に4基、中期に1基であったのが後期には14基に増加し、全体の7割を占めている点である。帆立貝形の前円墳は前期に16基を数えるに過ぎなかったが、中期には66基、後期に62基と、前方後方墳に代わるかのように増加する。しかし、中期についてみると地域的には、例えば前方後方墳が14基と多かった群馬県域に帆立貝形は8基みられるものの、栃木・千葉・茨城・埼玉県域ではそれぞれ6~13基であったのが僅か1基になり、中部地方でも23基みられた石川県域にはみられない。つまり、前方後方墳が多かった地域に多いわけではなく、帆立貝形古墳に取って代わられたわけではないことが分かる。

表1 時期別・墳形別の古墳の数

墳形	前期	中期	後期	終末期	不明	計
前方後円墳	541	403	990	1	2690	4625
内、帆立貝形前方後円墳	16	66	62	-	206	350
前方後方墳	232	10	20	-	204	466
双方中円墳・中方墳、上円下方墳	4	-	1	2	5	12
円墳	28	114	180	98	239	659
方墳	7	29	11	42	64	153
その他	2	1	2	4	26	35
八角形墳	-	-	1	7	1	9
不明	2	6	14	11	451	484
計	816	563	1219	165	3680	6443

以下、墳形、規模および立地について地域的特徴を中心に時期別(前方後円墳と前方後方墳については適宜10期編年でも言及する)にみることにする。なお、時期が推定されたものはデータベースに登載した6443基のうち42.9%にあたる2763基である。墳形別では前方後円墳では41.8%の1935基、前方後方墳で56.0%の262基、円墳で36.0%の236基、方墳で57.4%の89基で、データ化されたのは前方後円墳と前方後方墳は全数、円墳と方墳は主要古墳である点には留意する必要がある。

前期:墳形については円墳・方墳ともに前期は少なく、円墳が西日本に圧倒的に多く7割を占めるのに対して、方墳は数が少なく、7基の内5基が東日本に分布する。方墳は約半数が終末期(7世紀築造を終末期とした)であるが、上記のようにサンプリングの問題があり明確な傾向とはし難い。また、前方後円墳と前方後方墳約5100基のうち前期築造は773基あり、そのうちの前方後円墳は541基で7割を占め、その7割の363基が西日本に所在するのに対して、前方後方墳に限ると上記のようになり、両者の分布が東西に大きく分かれている。中部地方に82基(35%)と最も多いが、纏向石塚やホケノ山などの「前方後円形墳丘墓」に対比される前方後方墳丘墓が多く見られ、狗奴国の所在地ともされる東海地方よりも北陸地方が多い(石川県に23基と愛知県の14基よりも多い)ことは注目される。規模についてみると、相対的に小さい。

前方後円墳について10期編年に拠ってみると表2の通りである。表では区別していない前方後方墳は、2期になると全72基のうち50m超は25基と倍増し、北陸以東の東日本に20基、近畿以西には5基、3期には全62基のうち50m超は30基となり、東日本に20基、西日本に10基と大きく分布が変化する。

表2 前方後円墳(前方後方墳を含む)の時期別・規模別数

	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期	9期	10期	小計	不詳	合計
~29.9m	39	32	20	15	4	16	21	35	72	83	337	100	1343
30~50m	59	69	86	52	44	34	75	106	170	128	823	110	1932
50~70m	17	53	76	55	24	36	61	48	86	73	529	329	858
70~100m	13	28	62	53	37	30	19	35	45	43	365	118	483
100m~150m	9	15	38	24	28	17	13	19	17	19	199	34	233
150m~200m	1	1	5	13	8	2	4	1	0	0	35	0	35
200m~250m	0	1	4	3	7	1	2	1	0	0	19	1	20
250m~300m	1	0	2	0	2	2	1	0	0	0	8	0	8
300m~350m	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1	3	0	3
350m~	0	0	0	0	2	1	1	0	0	0	4	0	4
データなし	1	2	8	5	4	5	12	8	15	13	73	261	334
計	140	201	302	220	160	144	209	253	406	360	239	285	5253

ところが4期には50m超は14基と減少し、西日本はわずか2基になる。全数でも27基と急減し、西日本は6基となる。このように前方後方墳は東日本に多かったが、3期までは前方後方墳の最大規模の古墳は奈良盆地と淀川中流域の近畿

中央部に所在し、前方後方墳の築造が大きく減少する4期になって最大規模のものが東日本に出現する。

一方、前方後円墳については、1期では福島県が北端であったが、2期には宮城県南部へとやや北上するとともに、規模においても2~3期とされる梵天山古墳(151m)を仮に2期とすると桜井茶臼山古墳(201m)に次ぐ2番目の規模となり、さらに千葉県の新富塚山古墳(110m)が6番目、浅間神社古墳(106m)が9番目、飯籠塚古墳(102m)が10番目の規模であり、100m超が12基あり大型化が顕著にみられ、その内4基が関東に所在し、有力古墳の出現が目立つ。3期には100m超が46基とさらに大型化が進み、63%の29基、上位10基のうち9基が西日本に所在している。規模については前期を通じてみると、最大の300mの渋谷向山古墳から8番目の築山古墳(210m)までが奈良県にあり、20番目まででは11基、京都府に3基、大阪府に2基、兵庫県に1基と近畿地方に所在し、ようやく19番目に東日本の群馬県浅間山古墳(171.5m)が入り、17番目に位置する1段目が前方後方形で、2・3段目が前方後円形の変則的な形態を呈している西山古墳(180m)を除くとすべて前方後円墳であり、近畿地方の卓越性が際立っている。このような地域的差異からすれば前期においては、前方後方墳を前方後円墳が中心となる墳形を基礎にした広範な序列・格付けを反映するものとみることは困難ではないかと思われる。

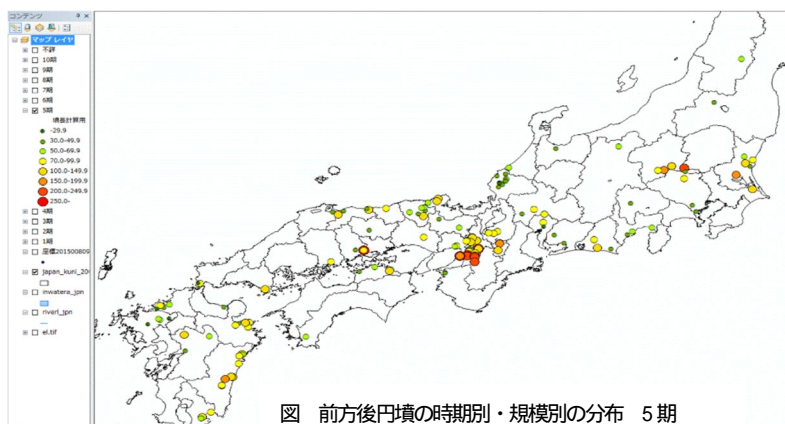
前方後円墳の一般的特徴として、埋葬施設は竪穴式石槨と長大な割竹形木棺、副葬品では三角縁神獸鏡などの青銅鏡が挙げられることが多いが、1期の140基のうち竪穴式石槨と割竹形木棺がセットでみられるのは8基に過ぎない。対象を広げて前期の前方後円墳でみると、竪穴式石槨を持つのは188基で、このうち墳長70m以上の比較的大規模な古墳は74基、割竹形木棺を有するものは47基で、最も多く4分の1を占める。このうち墳長70m以上の比較的大規模な古墳は18基あり、13基が畿内に所在するが、大規模な前方後円墳の特徴とは必ずしも言えないことが分かる。また、竪穴式石槨を持つ前方後円墳のうち、威信財として重要な船載三角縁神獸鏡を副葬するのは29基(他に粘土槨15基、不明15基)と15%ほどに過ぎず、14基が70m以上の古墳からの出土であった。また、42基が畿外に所在し、畿内は17基に過ぎない。威信財として同様に重要な画文帯神獸鏡と比べると、23基のうち畿内が13基で多数を占めるのと対照的である。このようにGISデータベースを使用すると、各時期の内部構造や副葬品なども合わせて分布の詳細な地域的傾向を比較的容易に把握できる。

立地に関しては『前方後円墳集成』における記述を基礎に、前方後円墳と前方後方墳以外は現地調査や地図上での暫定的な検討による簡単な類型化を試みた。これによりおよその傾向をみることはできるとされる。これによると前期には尾根とその端部やそれらの直ぐ下辺りおよび山地・丘陵の斜面といった山地・丘陵地が70%で、台地面やその端部が17%、自然堤防を含めた沖積地が8%ほどで、全時期を通じてみた場合に山地・丘陵地44.8%、台地面とその端部33.5%に対して、比較的比高が高い位置に多く立地していることが分かる。台地面やその端部への立地が中期さらに後期へと約10ポイントずつ増加し、山地や丘陵地への立地が減少する。円墳は前方後円墳に比べると台地の端部への立地が少なく、見え方を意識した立地という傾向はみられないようである。

中期、後期にも同様な検討が可能であり、現在も古墳の多様な属性の内地域的な分布をみる場合にどの属性が有意義であるか等々検討を種々試みている。紙数の制約から、以下では簡単に記すにとどめたい。

中期：円墳が大きく増加し、地域的には九州地方での前方後円墳と近畿地方での帆立貝形古墳の増加が目立つ。前方後円墳は前期の64%、前方後方墳は同3.5%と大きく減少する。10期編年によると、前方後

円墳は3期から6期にかけてほぼ半減するが、30m未満の小古墳はわずか4基となる一方で100m超の大型古墳が29%、150m超が12%、19基とその比率が最大になり古墳の大型化が頂点に達している。5期(図)には大阪府の百舌鳥陵山古墳(360m)が最大であるが、これに次ぐのが岡山県の造山古墳(355m)で、6期にも最大が大阪府の誉田御廟山古墳(425m)で、これに次ぐのが岡山県の作山古墳(286m)であり、同様の様相が窺える。



5期の奈良盆地から大阪平野に注目すると、大王墓と目される巨大古墳が百舌鳥古墳群、古市古墳群、佐紀盾列古墳群、馬見古墳群に複数存在しており、「前方後円墳体制」を検討する際に大王墓の認定にも関わることであり注目される

後期・後期には前方後円墳が前期と中期を合わせたよりも多く築造される。地域的には関東地方に362基と近畿地方の240基の1.5倍築造され、特に

10期にその3分の2近くが築造されていることが最大の特色で、近畿地方では築造数が減少する10期に関東地方、特に千葉県域で90基以上となせ爆発的に増加するのが注目される。

後期には群集墳が多くつくられるようになり、古墳の築造数は飛躍的に多くなるが、データベースに登録したのは国や県の史跡指定を受けた代表的なもので、地域的に比較的有力な勢力により築造されたとみなせる古墳が多い。ただ、後期・終末期の最大の円墳は丸墓山古墳(埼玉県、直径105m)で、直径が40mを超える大規模円墳は19基で、その内13基は東日本(内、11基は関東)にあり、前方後円墳の場合とは様相を異にする。

(2) 地方別の検討

これまでの検討から得られた地方別の暫定的な検討から、近畿地方と九州地方の古墳分布の特徴を簡単にまとめてみると次のようなことになる。

近畿地方では、大王墓と目される古墳が奈良盆地と河内平野で同時期に複数存在する。大和川が河内平野に出てきた位置とそれに連続する地域に所在する玉手山古墳群から古市古墳群における大型前方後円墳の築造が、奈良盆地を含めた他地域には見られないほど長期間にわたり継続する。画文帯神獸鏡は奈良盆地(大和川流域)と近畿中央部の前方後円墳からの出土のみで、三角縁神獸鏡が播磨西部揖保川流域に3か所、園部盆地、湖東平野にもみられるのに対して、範囲がより限られている。石製腕飾類の分布は近畿中央部に集中し、碧玉製腕飾はより分布が限定的である。

九州地方では、規模について3期から5期にかけての大型化が認められ、5期には100m以上の前方後円墳の割合が2割を超えるが、6期には1割に半減し、8期以降は50m未満の割合が大きくなり小型化の傾向が見られる。近畿地方では、7期には100m以上の大型古墳が依然として3分の1以上を占めるが、50m未満が3割弱に増加し、規模の両極分化の傾向が現れ、8期には100m以上の割合が半減し、50m未満が6割を超えるようになり小規模化は九州地方より顕著になる。

(3) 今後の検討に向けて

以上では全国的な視野での分布論的検討に終始したが、全体からすれば発掘調査が行われた古墳の割合が小さく、内部主体やその構造上の特色、副葬品など外見では分からない事項についてはデータが必ずしも多くはないが、これらを含めた古墳の様々な属性を指標として分布のまとめや時期によるその変化を抽出し、地域間関係やその変化の検討を進めている。

また、古墳の規模がある程度造墓主体の勢力の大きさを反映すると仮定すると、後期・終末期に大規模円墳が所在する地域には有力な集団が6~7世紀に存在したと考えられる。この時期であれば史料にそうした有力集団に関する記載、具体的には豪族の存在を示唆する何らかの記載があることが期待できる。史料から得られる豪族などの所在と有力古墳の分布やその属性との関りの検討は緒に就いたところであるが、古墳の様々な属性を指標に分析を進めたい。そのほか、土地条件図を利用して生産力を推定し、古墳分布との関りについての検討も試みているが、生産力の推定方法の問題をはじめ残された課題は多い。

データベースの構築と改良に予想以上の時間を要したことからGISを使用した分析・検討は推定生産力の算出をはじめまだ試行段階ともいえるが、GISを利用することで多くの事象分布を重ね合わせて検討することが、古墳研究においても新たな発見へとつながることは期待できそうである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 出田和久	4. 巻 848号
2. 論文標題 歴史地理系データベースの構築と紹介	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本歴史	6. 最初と最後の頁 14-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	石崎 研二 (ISHIZAKI Kenji)	奈良女子大学研究院・人文科学系・教授 (14602)	
研究協力者	宮崎 良美 (MIYAZAKI Yoshimi)	奈良女子大学・古代学・聖地学研究センター・協力研究員 (14602)	